

に考察している。

第5章では家族類型について、家族社会学の成果に基づいて、刻明な分析を行い、さらに前近代型・村落家族における「老人の座」、近代型・都市家族における「老人の座」について述べている。とくに村落型家族における老人の座については、階層別にみることによって、「比較的上層の家族における老人の座は、陽があたっているが、中以下の層の家族における老人の座は、全く陽があたっていない。そして中以下の層が大部分であることを思えば、全く暗い感じに打たれる」と結論づけている。これに対して都市型の家族においては、親子別居的志向、敬老思想の稀薄化、孤独化、経済的不安、私的扶養の弛緩と公的扶助の弱さなどを、具体的な調査事例で明らかにし、老人の座の不安定さと暗さを描いている。そしてこれらの老人の座の不安定さを、嫁と姑の問題でさらに明らかにしている。この章の分析は、実例も数多く引用され、よどみなく読むことができる。しかし強いて難点をいえば、家族と老人というよりは、家族論一般に記述の比重がかかり、それぞれの家族のパターンと老人の座について、今少し実証的な究明が欲しい気がしないわけではない。

第6章の老人の社会集団参加については、老人と集団参加の意義を概観し、さらに老人クラブを一つの手がかりとして、考察を行っている。そして「孤独は老人の最大の悲劇」といわれる事態をのりこえるために、老人クラブのもつ積極的役割を評価している。さらに老人クラブの今後の方向の一つとして、老人クラブが老人の政治的要求を実現するための組織の一つとして成長する必要性を示唆している。この点はいろいろ論議を呼ぶものと思われるが、その当否は別問題としても、老人の要求を政治的に解決することは今後何らかの形で検討されなければならない課題なのであろう。この点について、アメリカにおいても、たとえば F.A. Pinner をはじめ2、3人によって書かれた *Ald Age Political Behavior* (University of California Press, 1959) などを読むと、老人の政治活動の重要性が強調されていることを知ることができる。著者がこれらの文献を参照にされたかどうかは分らないけれども、老人のもつ政治的潜勢力を評価しながら、それを老人クラブの今後の課題と結びつけて、一つの方角を示唆しているのは、興味深いアイデアであろう。ただ惜しいことには、この章の記述が簡単にながれ、具体的な老人クラブ活動の実態について、今少し詳しい分析と記述が欲しい気がする。老練な著者の眼で、その具体的実態について把えられたところを示し、批判と助言

が与えられていれば、上記の著者の提案もより説得的になったと思われる。

第7章、第8章はいわゆるマクロのレベルでのアプローチの一分野として、余暇を取上げている。

著者は老人を新しい余暇階層として把え、老人の社会的な在り方を、余暇との関連で明らかにしようとしている。とくに第8章では、日本の老人の余暇はあまりにも恵まれなさすぎるという点を、実態調査をもとに指摘し、老人福祉対策を考える上で、興味深い示唆を与えてくれている。

この点については、上記の那須宗一著『老人世代論』で問題となった余暇と老人の研究視点をさらに一步すすめ、一般化したものということができる。

第9章は都市化と老人という今日の課題を取上げている。ただこの章では都市化についての論述が主で、老人との関連については深い分析はない。

第10章は老人の社会的役割を、老人の保守性、保守主義との関連でとらえる。この問題も、『老人世代論』で言及されているが、この本では、老人のもつパーソナリティの保守性と、イデオロギーとしての保守主義を一応区別しながら、それらが急激に変動する社会において、どのような役割を演ずるかを論述する。この章ではどのような役割を演ずる必要があるかは具体的に述べられていないが、現代日本社会における各種リーダーのもつ保守性を調査結果で指摘しているのは参考になる。

以上、各章ごとに、その内容紹介と若干のコメントを行ってきたわけであるが、章によって示唆に富むものも少からずみられた。しかし何よりもこの本は、老人問題を社会学の視点から眺め、一つの体系だった理解を与えてくれる点に格別の意義があるように思われる。それと同時に、老人問題の社会学的研究が今日においても、それほど多くない状況のもとで、この本は依然として先駆的な役割をもっているともいえる。

しかしそれだけに、いくつかの問題がないわけではない。たとえば上述したように、この著書全体をつらぬく三つの問題領域と、三つのアプローチは、それなりに重要な視点であるが、それらの関連性をどこに求め、全体的な統合・体系化という点では、若干の不満は残る。また章によっては、精粗が必ずしも統一されていない印象もないわけでない。

また著者は老人問題を人口高齢化を基軸に考えているが、これは格別に異論をはさむ余地はない。しかしこれと同時に Industrialization なり、社会変動を別の軸としてみることも、社会学的には必要であり、また可能では

なかったのではなからうか。もしこのような分析の軸を、一方で樹てることができるとすれば、たとえば家族のパターンにしても、近代・前近代という二分法で単純化しなくてもすむのではないであらうか。同じことは、第10章の老人の社会的役割についても、それを安定的社会と変動的社会といった類型分けだけでなく、今少しダイナミックな分析も可能になるのではないであらうか。しか

しこのようなコメントについては、著者は先刻ご承知のことであろうと思われる。妄言をお許しいただきたい。

いずれにせよ、未開拓の分野を切開き、明確な論旨を展開し、後学のものに多くの示唆を与えているこの著書は、今後の老人研究にとって、必読の一書となることは明らかである。

(三浦文夫 社会保障研究所員)

Ch. ソウアー, J. ホランド, K. ティーク, W. フリーマン著

『地域住民の協同関与—— 協同活動に至る公私諸関係の繋がり』

Christopher Sower, John Holland, Kenneth Tiedke, Walter Freeman, *Community Involvement: The Webs of Formal and Informal Ties That Make for Action*
The Free Press, 1957, pp. 323

アメリカ中西部の一郡で700人の住民が自発的に面接員となって協力し、1万に上る世帯に保健に関する戸別面接調査が実施された。ミシガン州立大学のルーシスの指導の下に編成された調査班は、この大規模な保健サーベイの発端から終結結果までを、まったく第三者の立場で調査したのであるが、その成果を示すのが11年前に刊行された本書、つまり標題に掲げた著書である。

ところで書評に取上げる著書の一つの選択基準は、なるべく最近の刊行書ということであろう。冒頭で対象著書選択理由をあげるのは、書評展開の一般定石と考えられるが、上記基準を無視して11年前の刊行書を取上げているこの書評の場合には、単に一般定石という以上の意味をこめて選択理由を十分に説明する必要がある。

多少唐突または迂遠な感も懐かれるであろうが、その説明を限定的コミュニティ概念ということから始めることにする。従来のコミュニティ概念は多種多様であったとはいえ、地域性、共属感、生活の共同と完結性など多くの契機を包含する基礎社会という含意が中心になってきた。具体的調査では政治、経済、教育、宗教、家族、階層などの多くの側面が取上げられ、しかもそれらは相互に関連して一つの全体的統合体、つまり holistic なものとみられてきた。これを包括的コミュニティ概念と呼ぶことができよう。これに対し限定的概念では、多側面の寄り集りには local society または local aggregate という用語をあて、コミュニティ概念の経験的照合とな

るものをそのうちの一側面、例えばカウフマンによれば、人々が一定地域に共住することから発生する目標に導かれた相互作用過程、または一連の地域志向的作用過程に限定する。一定地域内の社会現象とはいえ、個々の家族そのものは、一定地域内の共住ということから共通の問題に直面し、それに対応するために他の多くの家族と相互作用過程に入らない限り、コミュニティ概念には内包されない。これは他の諸側面についても同様であるが、ただ地域の政治や行政はほとんどが、上記の規定に該当する相互作用過程と考えられる。同様の観点はサットンとコラヤ、パースンズ、ロッシにもとられており、特にサットンとコラヤはさらに一步を進めて限定的概念の操作の規定も試みている。

以上のことから第2の理由が派生する。というのは、包括的概念によって導かれた調査は、地域における諸部分集団の画定とかそれらの間の固定的相互関係のパターン、つまり構造を問題としたが、限定的概念の指示するものは、相互作用過程、特に地域的関連性のある出来事や係争点が、それをめぐる相互作用の中で推移してゆく過程である。換言すれば、その出来事や係争点の発生から終結までの過程である。わが国でも地域の諸問題、例えば工場誘致が、それをめぐる住民の動きの中でたどってゆく過程に対する研究関心が高まっているが、今のところそのような研究は概念規定やその他の理論的検討とは断絶したところで行われている嫌いがある。

理由の三は、このようなわが国の研究がクロノロジカルな記述に終止する傾向と関連している。係争点の推移の研究がそのような傾向に陥りがちであり、一般化された知識を引出せるものが少かったことはロッシも認めるところであるが、しかし本書では事実の経過の具体的記述と併行して、かなり一般化への試みがなされており、上記のようなわが国の研究関心には示唆する点が多いと考えられる。

次に理由の四であるが、本書では地域福祉活動と住民参加が扱われている。福祉の重視は、マーシャルがイギリスについて述べたように現在の先進国における市民的権利の主内容をなすものであり、特に地域福祉は過密と過疎に悩むわが国の当面する重要課題である。そうしてその課題の解決に当たってつねに求められる一つの方向が住民参加の問題である。

最後に理由の五を説明すると、地域の出来事や係争点の経過について、少数ではあるが一般化を試みた研究が最近現われていないわけではない。グリーンとメーヨー、コールマン、バンフィールドの研究がそれである。しかし一般化が試みられていると同時に、研究対象が地域福祉活動と住民参加であるという研究はさらに少い。本書の他には、S.T. Kimball and M. Pearsall, *The Talladega Story* (1954), が挙げられるが、これは理論化の点で本書に劣る面があり、刊行は本書よりさらに3年以前に遡る。これらの理由、とくにその四、五に見合う研究を求めてゆくと、結局は11年前に刊行された本書に絞られることになる。

以上が本書選択理由の説明であるが、この説明によって同時に本書の性格や意義もある程度明らかにされたであろう。次は内容紹介に移らねばならぬが、全体で13章、その幾章ずつかを第1部から5部までに纏めてある本書を、各章別に紹介することは止めておく。まず出来事の具体的経過に関する部分を各部別に要約するが、その要約では後の理論化に関係する事実を重点的に取上げることにする。

(第1部) 保健サーベイの行われた郡の価値体系においては個人主義的要素が強く、住民の福祉のために全体的措置が必要な時にも政治の干渉によることなく、住民自体の自発的な奉仕と協力による解決を望むが、これは個人主義的価値志向に由来する。主要産業は農業であったが、最近では中心都市とその周辺に工業化と人口流入が進み環境衛生上の問題を発生させている。この背景の下に郡保健局が開設され、さらに州勧告に基づいて郡内関係諸機関と民間組織の活動調整のため、その代表者によ

って構成される保健委員会が設けられた。しかし一般住民は医療の個人治療の側面のみを必要とし、予防的公衆衛生には、それが公的干渉を伴うこともあって関心が乏しく、保健局の評価と委員会への出席率は芳しくなかった。

(第2部) 現状打開を望む保健局長の保健サーベイ実施案は、多少の迂余曲折の末、保健委員会内に新たに教育・広報小委員会を設けて検討されることになる。郡農事奉仕所長、保健局長、保健委員長(同時に病院理事長、看護協会長)、教育長からなるこの小委員会では、各委員のサーベイに寄せる関心はさまざま(住民の啓蒙、保健活動推進の基礎データ集収、農民生活の改善、地域の名誉の向上、教育基盤の充実など)であったが、サーベイ実施ということでは「関心の重合」が生れ、個人的目標とは別な「集団目標」に意見の一致をみるようになる。

これに伴って彼らの間に新たな権利義務関係が現われて「始動集団」の中核が形成される。次に集団目標が地域福祉に役立つものという承認を外部から得ること(正当化)が必要になるが、それには承認を求むべき人の選択(手段の選択)と承認獲得可能性(手段利用可能性)を見通した上で、その人達に接触し実際の承認を受けねばならない(手段への接近)。この具体化には彼等が同時に他の機関や組織に所属(組織の交錯)することに伴う経路が活用され、それによって医師会長や民間防衛団長など、承認と支援を与える一群の人々、つまり「支援集団」が形成された。ただ正当化の根拠としては、これらの人々の代表する組織の目的に照らして、医療社会化を不要にする自発的な医師の地域奉仕の証明とか民間防衛の基礎充実などを新たに加える一方、住民の啓蒙は外部に対する正当化の根拠としては撤回するような処置が必要であった。また公衆衛生の不理解から一部にみられた反対に対しては、中立的立場に留める説得工作がなされた。

(第3部) 以上は郡レベルでの経過であるが、次は郡内各地でのサーベイ実施段階に入る。その第1の課題は各地住民の間から面接員を確保することであり、始動集団と支援集団がメンバーが持つ組織的経路を通じてまず地域リーダーに接触して各地で説明会が開かれる。かくしてリーダー達はサーベイの意義を承認し、彼らによる始動集団の形成が各地に現われる。彼らは従来から地域奉仕精神に富む人という認知を受けており、彼らの承認はそのまま各地での正当化を意味するものであった。面接員の確保は、組織、有力者、朋党、親族、地理的接近、等の経路を通じてなされたが、面接を引受けた住民は必ずしも公衆衛生の重要性を理解しているとはいえず、他にサーベイ反対の地域も残っていた。それでも面接員の数

が700、面接世帯数が1万に上ったのは、リーダーが住民の持つ地域奉仕の精神、つまり「善意の貯蔵源」を引出すことに成功したからである。新聞、ラジオのようなテクノロジーも利用されたが効果は間接的であり、決め手となったのは、信頼を寄せられているリーダーの承認したサーベいは、地域福祉の向上に連なるという認知から、住民が自発的に協力するようになったことである。この認知様式が異れば、善意資源もサーベい反対に回る可能性もあったが、それを賛成に向けたのはリーダーの持つ地域活動の技量によるものであった。

(第4部)大規模サーベいの遂行という集団目標は以上のようにして達成されたが、このサーベい実施中と完了直後は公衆衛生への関心の一応の高まりがみられ、保健委員会への出席率も向上した。しかしそれは一時的現象で、出席率は間もなく急速に低下し、一般住民もサーベい遂行にはあれほどの協力を示したにもかかわらず、サーベいの集計結果にはほとんど無関心であった。個人主義的意識の強いところでは、全体的計画や調整を計る組織

の存続は困難なことであり、保健委員会は結局解散することになった。しかし、突然発見(serendipity)として現われた一つの注目すべき点は、始動集団と支援集団に属していた人々の間には、サーベい推進中にできたインフォーマルな関係が、保健委員会というフォーマルな組織の解散後も残っており、フォーマルな組織の目標であった地域の保健について各人が何かの問題に直面した時には、このインフォーマルな関係を通じて解決をはかることが多かった。

以上が具体的経過の概要であるが、既述のようにこのような具体的データから進められている一般化が本書の重要な特徴である。経過記述の中に一般化への部分的考察が示されている箇所も少くないが、特に一般化を集中的に扱っているのは第5部で、ここではコミュニティ・アクションの経過モデルが検討されているので、次にそれを紹介することにする。

まずモデル設定は当然抽象化を伴うが、極端に一般性を求めて過剰抽象に陥ってはかえって有効性が失われる

ので、具体的データで検証の可能な程度の抽象レベルを考えたことが指摘される。これは妥当化の範囲とも関係する。つまり設定されるモデルが妥当するのはすべてのコミュニティ・アクション過程でなく、①自発的、②問題志向的、③地域的に統制され、④分散的権威の下での過程である。このような予備的検討の後にモデルの分析的構成要素として、「関心の重合」「始動集団の確立」「正当化と支援」「実施集団の確立」とコミュニティ資源の動員「集団目標の実現」が析出されるが、さらに一步進んでこれら要素の関連について左図のモデルが提示される。

このモデルの左上端欄「社会秩序に適合する象徴と感情」は具体的には個人主義的価値体系や地域住民の自発的協力の尊重など(第1部)を指すが、その他の部分については既に紹介した具体的経過の要約で理解していただけたであろう。このモデルの提示とフォーマルな組織解消後に残ったインフォーマルな関係の機能(第4部)が、本書の理論化の中心部分と考えられるが、その他にも部分的な一般化が試みられている。(例えば、地域活動への参加動機としては、イデオロギー、照準集団、個人的動機の3タイプがある(pp. 86-95)。始動集団の集団目標に対する合意と外部への正当化とは一致しない(pp. 98-99)。地域活動の成否を決定するのは始動者

